埼玉新聞
（第３種郵便物認可）

サイ・テクこらむ 知と技の発信 【550】

埼玉大学・理工学研究の現場

社会基盤施設がもたらす風景

深堀清隆 准教授

さいたま市では大宮・浦和駅周辺の都市開発が盛んです。変貌著しく、便利で住みたいまち上位ランクの勢いが感じられます。私は市民有志と共に風景モニタリングの地域活動を行っていますが、本来の自然や生活文化を継承すると同時に、まちの変貌を受け止め、そこから生み出される活動文化や都市風景を新しい価値として共有する姿勢も大切だと思っています。

道路や河川などインフラ（社会基盤施設）は都市の安全や利便性に寄与しますが、開発と同時に地域の自然や文化をありのままに継承することは困難です。インフラにより多くの遺産が失われたのも事実ですが、一方、開発やインフラと複合化した文化的風景資産が生まれることも魅力ではないかと思います。さいたま市には都市開発が旺盛なため、かえってその影響に対して強く修復を働きかける文化的風土があるのでしょう。

ここでは、風景・自然と共存するインフラを二つ紹介してみます。まずは見沼田んぼを通る首都高埼玉新都心線ですが、ユニークな環境修復を伴うインフラで、見沼の開発規制の基本方針に配慮し大規模なビオトープが設置されました。高架道路の北側を樹林帯が縁取り、桁下では湿地・草地環境が再生され環境教育で活用されています。北側から見ると水田を目前にビオトープの樹林が水平に連なり、橋桁を支えているかのように高く育っています。橋梁（きょうりょう）と樹林に包まれた見沼の生物の隠れ処は芝川に寄り添い、15年を経て周辺の斜面林の風景にも大分なじみました。背後にそびえる新都心のビル群と自然と共存した道路の風景は、グリーンインフラ（自然の恵みを活かす賢い社会基盤）のシンボルと言えます。

もう一つは元荒川の末田須賀堰（せき）です。400年近い年月を経てさまざまに改造され現在に至っています。田に水を配るため4月から9月まで堰が閉められると広々とした水面の牧歌的風景が上流まで広がります。水門が開放されると湿った川底が顔を出しますが、やがて幻の花と呼ばれるキタミソウがかれんな花を咲かせるのは、堰と水田の毎年の営みが川の環境と混然一体となってもたらす恵みです。堰周辺の空間整備は市民に環境保全や水辺活動の舞台を提供しています。

インフラの環境修復技術はさまざまありますが、地域固有の自然や文化を複合して採り入れる整備を行うためには関係機関や市民に高い環境保全意識が求められます。今後のインフラ整備を巡る動向も気になりますが、国はもとより市は主に防災や都市ブランド力向上の視点から、自然を生かしたグリーンインフラ推進を強調しています。またCOP15を批准した日本の生物多様性国家戦略を見ても自然の保全・回復について、公共事業は先導的な役割を果たすべきでしょう。CO_2排出量と違い、自然や文化的景観の価値評価は困難ですが、環境影響評価による最低限の対応以上に、積極的な修復や再生が求められる時代と言えます。

市内では今後も河川調節池の整備、高速道路の延伸も計画されています。元来そこにあった自然の一部のように風景になじんで地域文化を継承し、市民や生物の活動の場ともなるインフラ整備が期待されます。回避できない風景変化の代償に自然を十分再生するとも考えられます。

ふかぼり・きよたか　1968年生まれ、97年3月埼玉大学大学院修了。博士（学術）。現在同大学大学院理工学研究科准教授。専門は景観工学。